
再び輝く仁の星

龍斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

再び輝く仁の星

【Nコード】

N9469N

【作者名】

龍斗

【あらすじ】

南斗白鷺拳伝承者シュウは死んだ・・・しかし目が覚めると何処か分からないところにいたそしてそこで神に会い転生をする仁の星の宿命と共に・・・

ブログ（前書き）

シユウを知らない人はYOUTUBEでシユウと検索すればできるので
それを見てください

プロローグ

此処は・・・此処は一体何処なのだ？私は確かに死んだはずあの時私はサウザーに捕えられ

聖帝十字陵の頂上で死んだはず・・・ふむならここはあの世なのかならば何処かにシバやレイ

カナンがいるはず・・・探してみるか

？「探しても見つからんぞ」

！！？私が後ろをとられた！？仮にも南斗白鷺拳の伝承者である私が・・・只者ではないな

シュウ「貴方は？」

神「俺は神だ」

神？仮にそうだとしても何故こんなところにそれに見つからないとはどういうことだ？

神「仮にじゃなくて本当に神だぞそれとここはあの世じゃないからお前が探している奴等は見つからない
そして何故俺がお前の前にいるのかと言うとズバリ生き返ってみないか？」

シュウ「生き返る！？それは何故だ？」

神「いい質問だなまあ一番は俺がお前を気に入ったからだ」

シュウ「私を気に入ったから？」

神「そうだ今時お前みたいな奴珍しいなと思ってな」

そんな理由でしかしそれならばケンシロウやレイ、トキだって

神「そこらへんは俺の偏見だ」

シュウ「神が偏見していいのか」

神「まあそう言うなで答えは？断るならあの世に逝かすが」

シュウ「私は・・・」

私はどうしたいんだ・・・このままあの世に逝っても・・・いやそんなのでは

駄目だ私の宿星は仁星”広く愛を施し未来の希望に生きる星”このままでは逝けぬな

シュウ「生き返らせてくれ」

神「そう言うだろうと思ったぞあつ！そうだ」

シュウ「ん何だ？」

神「ちょっとな」

シュウ「ッ!？」

そう言うと神は指をパチンと鳴らしたと思えば私の体がいきなり光

だした

そして光が治まり私は自分を見て驚愕した

シュウ「これは！?・・・若返っているのか？」

今の私は南斗白鷺拳の伝承者となった時の年齢18歳の姿をしていた
そして眼の傷もなくなっていた

神「ほぉ～お前けっこうイケてるな」

シュウ「普通ぐらいだと思っが」

神「いやいやイケてるぞ」

シュウ「ありがとう」

神「今度は死ぬなよ」

シュウ「ああ南斗白鷺拳伝承者シュウこの名に誓って」

こうして私は・・・いや俺は新たな人生を歩むことになった

プロローグ（後書き）

シュウの名前最後しか出てない・・・それにシュウの妻の名前
勝手に決めた

第一話ハ仁星の誕生（前書き）

何処に転生させようかなと思ってましたがハーレムなら此処！
の真・恋姫無双にしましたどうぞお楽しみください

第一話 仁星の誕生

シュウ（知らない天井？・・・そうか転生したんだっ たなさて何処に転生したんだ）

と思い体を動かそうとしたところ・・・

シュウ（ん？動かない・・・それにこの体・・・赤ん坊？）

何故赤ん坊に？あの時若返らせてくれたからそのままいくのかと思
ったが

というかこうするんだっ たら何故若返らせたんだ？

神（いやゝお前の若い姿が見てみたくな）

シュウ（はあ・・・もういいかところで体が動かないんだが）

神（当たり前だ今のお前0才児だぞ）

シュウ（じゃあどうすればいいんだ腹も空いてきたし）

神（泣けばいいだろ）

シュウ（ふむそうか・・・では）

シュウ「おぎゃあ！おぎゃああああ！！」

？「おおどうした坊お腹が空いたのか？」

？「あらあらじゃあ母乳をあげなくちゃね」

出てきたのは前の俺と同じ年くらいの輝く銀髪が印象的な男性と美しい黒髪の

綺麗な女性が出てきた。おそらく父と母だろう

シュウ「けぷ」

母「本当に可愛いわねさすがは私達の子ね」

父「ああそうだな将来いい男になるだろうな」

この2人は親バカだなしかしこんな体験はしたことがない俺は小さい時から南斗の寺院で

修行をしていたそれ故に親というものが分からなかったがこれは・・・いいな

サウザーが温もりがどうか言っていたが今なら分かるなあいつの気持ち

シュウ（ん・・・眠気が・・・）

母「寝ちゃったわね」

父「ああ」

母「そういえばあなたはこの子の名は決めているの？」

父「もちろんだ・・・だがそれはこの子が起きてからにしよう」

母「そうね・・・おやすみ私達の可愛い坊や」

シュウ（おやすみ・・・父上・・・母上）

第一話「仁星の誕生」(後書き)

転生したシュウが赤ちゃんの時です
ね次回から色々と時間軸が
飛びます

第二話「隣の夏候家」(前書き)

ハーレムの ですが偏り的には魏が多いかも

第二話「隣の夏候家」

あれから5年の月日が流れた動かなかった体も動くようになったとして

今は、修行中

？「ふっ！はっ！シヨオオ！」

斬！

？「烈脚空舞！」

斬！斬！斬！斬！

？「ふう〜しかし驚いたな」

今の俺は、数えで5才まさから才でここまで、白鷺拳ができるとはやはり記憶が

残っているからか？

？「秀〜！」

秀「ん？」

突然名を呼ばれ振り返ると、黒い髪の少女と、水色の髪をした少女がこちらに走ってきた。

ちなみに、俺の姓は止、名は水、字は龍才だ今の秀とは俺の真名だ真名とは、とても神聖なもので

教えられてもない者が呼べば殺されても文句が言えないそうだ、初めは驚いたが注意すればどうとでもなる

秀「春蘭か、どうしたんだ？」

春蘭「秀をみつけたからきた。秀はまたしゅぎょう？」

秀「ああ、強くなりたいからな」

？「どうして秀は、強くなりたいの？」

と春蘭の妹の秋蘭が尋ねてきた。真名で分からないだろうが春蘭の姓は夏候、名は悖、字は元嬢で

秋蘭は、姓は夏候、名は淵、字は妙才だ

秀「春蘭や秋蘭を守るようになるためにだよ（ニ）」

春蘭＆秋蘭「／／／／」

秀「どうしたんだ２人共顔が真っ赤だぞ？」

春蘭「なっ何でもない!？」

秋蘭「うっうん何でもないよ!？」

秀「そうかならないけど」

しかし何で顔が真っ赤なんだ？（鈍感）

春蘭「そ．．それより」

秀「何だ？」

春蘭「今日で最後なんだ．．だから」

最後．．．そういえば春蘭達は明日には洛陽の曹嵩様のところの娘の近衛兵として

洛陽に行くんだっとな．．．なら

秀「今日は、一日中一緒にいような」

春蘭＆秋蘭「うん！」

その日一日は、思う存分遊んだしかし楽しい時間は早く終わってしまうのが常

日が暮れる頃には、もう親が迎えに来ていた。

秀「もう終わりだな」

春蘭「う．．．ん」

秋蘭「ねえ．．．秀」

秀「何だ？」

秋蘭「また．．．会えるよね？」

秀「もちろんだ、また会えるいや．．．会いに行く」

秋蘭「ありがとう」

春蘭「じゃあまたね」

そう言って、春蘭達は帰っていったそして、翌日春蘭達は、洛陽に行ってしまった。

そして、物語はここから13年後に序章が始まる。

第二話「隣の夏候家」(後書き)

幼馴染は夏候姉妹ってな感じですね

13年後だと18歳ですがその間に色々と旅をします

次回は新たな出会いへの旅

第三話へ白鷺の旅立ち（前書き）

この作品ですがやっぱりシュウだけというのはあれかなと思うので

ぼくの好きな南斗六星拳の人を2人ほど登場させようかなと思います

誰が出るかは楽しみに

第三話 白鷺の旅立ち

春蘭と秋蘭と別れて、13年の月日が流れたあの後俺はさらに修行をし白鷺拳を

今まで以上に使いこなせるようになった

秀「ふむ・・・ここまで白鷺拳を使えるようになるとは」

今の自分ならサウザーを止めることが出来たかもしれないな

まあ過ぎたことは仕方ないか

秀「そういえば今日は、父上と母上の結婚記念日だったな何か贈り物を用意しないと」

しかし何を渡そう確か去年は2人にお揃いの手作りの首飾りをあげたんだっとな

なら今年は指輪にしてみるか

秀「・・・できた」

デザインは父上と母上の好きな花の桜をにした喜んでくれるといいけど

どうも私は姓は李、名は明、字は白楚、真名は美蓮、秀の母です。

名が出ていないようだったので自己紹介を

しました今日は蒼との結婚記念日です去年はあの子が首飾りをくれましたが今年は

何してくれるんでしょうね。とても楽しみです。

秀「母上ー！」

あらあらそんなに走ったら転びますよ。まったく可愛いわね。それに蒼の言う通り

いい男に育って母さんは嬉しいわ

指輪も出来家に帰ると、母上が外に出ていた俺は思わず母上に向かって

走った。

秀「母上、ただいま」

美蓮「おかえりなさい」

秀「母上、父上は？」

美蓮「まだ寝ているわたまの休みだから起こさないようにね」

秀「はい！あとこれ」

美蓮「あら、これは指輪かしら」

秀「首飾りをあげたから今度は指輪をと思って」

美蓮「うふふ、ありがとう秀大切にするわ」

秀「ありがとう、父上氣に入るかな？」

美蓮「ええ、きつと蒼も喜ぶわね」

ちなみに、父上の仕事は何処かの県令の文官だそうだが何処かは知らないが

父上曰くよくサボるし戦では前に出たがるしと、愚痴を言うが良い人だと

言っていた一体誰だろうか？

そして、最近気になることがあった。それは黄巾党という賊があちこちに出て村などが

被害をうけているらしい、俺はこういった連中を許すことは出来ない

あの時レジスタンスを組んだ時もそうだったからだ。

ならば、俺がやることは一つ仁星の宿命とかではなく俺の意思で

俺は旅に出るそしてせめて手の届く人々を救ってみせるまずは父上

と母上

を説得しないとな

秀「父上、母上話したいことがあります」

父「何だ改まって」

秀「はい、俺・・・旅に出ようかなと思います」

父「それは何故だ？」

秀「人々を救いたいからです」

父「そうか・・・いずれはこうなると思っていたが分かった」

秀「父上！じゃあ」

父「しかし条件がある」

秀「条件？」

父「そうだ、条件とは・・・美蓮に勝て」

秀「母上にですか」

父「そうだ」

確か母上は元武将だったとは聞いているが一体どれほど強いのだろ
うか

今思えば俺は母上のことあまり詳しく知らないなかし・・・やる
しかない

秀「分かった」

父「美蓮いいか？」

美蓮「ええ、私も秀と戦いたかったし」

秀「母上・・・手加減はしないでよ」

美蓮「当たり前前よ秀も手加減しちゃ駄目よ」

秀「はい」

分かっていたことだがこんなに早く言うとは、俺は姓は季、名は奉、

字は高董、真名は蒼

息子の秀は、いつかは旅に出るのだろうとは思っていた。それがあの子の進む道ならと

は思っではいたがまだ行っで欲しくは無い・・・18という年齢は、いい頃合だが

だから俺は、条件を出した美蓮に勝つこと秀も武は出来るようだが

美蓮は強い今で言うなら俺の主の孫堅殿に匹敵するほどだろう

悪いな秀まだ・・・俺達の傍にいてくれ

母上と戦うためいつも俺が修行に使っている場所に来た。

俺は、手甲を付け構える母上も槍を構えた殺気は出してはいないが強い

その一言だが、・・・・勝てる！自惚れではない勝てる

そういう感じがする。

秀「母上、行くよ!」

美蓮「きなさい、秀!」

秀「はああああ!南斗烈殺拳!」

美蓮「っ!?!」

がきん!がきん!がきん!

鋭い手刀の連撃を槍でいなす。母上しかそこに余裕はない

秀「母上も反撃して」

美蓮「言うわね。でもこんなに強いなんて正直予想外よ」

秀「まだまだ、こんなものではないよ」

美蓮「じゃあ私も、本気だすわよ」

母上の雰囲気が変わる先は殺気を出していなかったが今は本気の殺気を

俺に向けている。そして……母上が動く

美蓮「はっ！はい！はい！はい！はい！」

高速の連続突き並の武将なら間違いなく見切れることは出来ない視界を覆いつくす。

槍………だが

秀「当たらないよ、母上……南斗白鷺猛脚！」

斬！

後ろに、仰け反り脚を放つが母上は後ろに飛びのきかわすしかしそれは、予測済み

秀「いきますよ母上これぞ、白鷺拳の真髄・烈脚空舞！」

美蓮「きゃああああ！」

変幻自在の脚技が母上を襲い母上は倒れるそして俺は母上の首筋に手刀をあてる。

秀「勝負あり……だね」

美蓮「ええ、まさか負けるとは思わなかったわ」

蒼「本当だな、まさか美蓮が負けるとは」

秀「俺も修行を沢山したからね。で父上」

蒼「はあ、仕方ない行って来い秀そして人々を救ってこい」

秀「はい！」

美蓮「でも、明日にきなさいよもう晚いしね」

ということ、父上、母上から旅に出る許可をもらいその日は旅の支度をした。

そして、次の日

秀「父上、母上行ってきます」

蒼「秀。少し待て」

秀「何？」

蒼「これを俺と美蓮からの餞別だ」

秀「これは、手甲と脚甲？」

蒼「そうだお前のはもうボロボロだろそれに、それは鍛冶屋に作らせた一級品だ」

秀「ありがとう父上、母上」

美蓮「名は、秀が決めなさい自分の一部となる武器ですからね」

武器の名……か手甲と脚甲の色は白銀でそれぞれ、龍と虎が、彫られている。

そして龍の目には蒼い石が、虎の目には紅い石が、埋め込まれている。……よし！

秀「手甲の名は、紅虎、脚甲の名は、蒼龍だ」

美蓮「いい名ね。大切にしなさいよ」

秀「はい」

古い手甲を外し、紅虎と蒼龍を装着する。すると吸い付くように、はまるすごい

その一言だ初めて着けるのに、まるで長年使っているかのように

秀「父上、母上行ってきます」

蒼「行つてこい」

美蓮「たまには手紙を書いてね」

秀「はい」

こうして俺は、旅に出た人々を救うために・・・黄巾党を討つために

今仁の星は光った。

第三話「白鷺の旅立ち」（後書き）

ついに旅び出ました最初は誰に会うんでしょうか

そして今敵はどうしましょうと考えていますやはりシュウの敵と言え

彼の将星でしょうか

そして意見があってシュウの能力を外します

第四話「VS黄巾党」(前書き)

はい！ここから！こ・こ・か・らシュウ無双が始まります。

どうぞお楽しみください

第四話「VS黄巾党」

旅に出て2週間が過ぎた。食糧も路銀もまだ十分にある。

しかしそろそろ、布団が恋しくなる。

何処かに村はないだろうか

秀「また今日も、野宿かな」

そうして、半ば野宿を覚悟したとき俺は、ある異変に気がつく

秀「っ！？これは血の臭い」

何処かの村が襲われているのなら、早く行かなくては

方向は・・・東の方か！

秀「これは・・・ひどい」

村は焼け焦げ民は傷つき、その顔は皆、絶望しているようだった。

俺は、一先ず何があったか聞くことにした。

秀「一体何があつたんだ？」

町民「黄巾党が襲つてきたんだ」

秀「やはり、しかしここの県令はどうしたんだ？」

町民「あいつは、黄巾党が襲ってくる前に逃げやがったよ」

秀「くつ、何て奴だ！」

町民「そんなことより、坊主早く逃げたほうがいい、また来るかもしれないから」

秀「数はどれくらいいたんだ？」

町民「確か、五百はいたはずだぜ」

五百か・・・その程度の数なら、なんとかなるな

秀「その黄巾党は、何処に？」

町民「ん？この先にある谷にいるんじゃないのか」

秀「そうですか」

町民「ちよつ、何処へ行くんだ！？」

秀「黄巾党の所に」

町民「馬鹿か坊主！？殺されちまうぞ」

秀「死なないさ」

そう言い残し俺は、黄巾党の所に向かった。

恐らく黄巾党は、村を襲うのに成功して舞い上がっているはず

そして、案の定黄巾党は酒を飲み、宴会をしていた。

秀「よく、奪った物であそこまで、陽気に宴ができるものだ」

俺は、怒りを通り越し、呆れてしまう

そして、俺は地を蹴り大きく飛躍し黄巾党がいる所に着地した。

黄巾党A「なっ！？何だてめえは！」

秀「俺は、お前達を裁く者だ」

黄巾党頭「何いー！ガキのくせにしゃらくせえ！野郎共殺っちまえ
！」

リーダーらしき男が声を荒げる。

それを合図に他の黄巾党が襲い掛かってきた。

剣を振り回し、こちらにくる黄巾党の攻撃を避け反撃をする。

秀「はああああ！シヨオウ！」

黄巾党A「ぎゃあ！」

黄巾党B「べぎゃあ！」

黄巾党C「なっ！？何だよこのガキ素手で斬りやがったぞ」

黄巾党頭「ちっ！困め相手は1人なんだぞ！」

ふん！困めか・・・こちらとしては好都合だな

そもそも、俺の南斗白鷺拳は一对多が主流なのだ

秀「はああああ！たああ！！」

俺は大きく飛躍し空中で体制を変え、逆立ちした状態で

着地する。そして、・・・。

斬！斬！斬！斬！斬！

・・・体制を戻し

斬！！

秀「南斗烈脚斬陣」

黄巾党C「ばつ、化け物に、逃げぎゃば！」

秀「貴様ら、誰一人逃げられると思うなよ」

そして、一刻も経たない間に黄巾党をすべて殺した。

そこから俺は慈悲の念を込め、黄巾党の亡き骸を埋め墓を作った。

秀「来世では、善人でいて欲しいものだな」

そう言い残し俺は、あの村に帰った。

町民「あっ！？坊主無事だったんだな黄巾党は？」

秀「全員、殺してきました」

町民「は？も、もう一度言ってくれ」

秀「全員、殺しました」

そこからが大変だったあの村の人があの谷へ、確認しに行つて

戻ってきたかと思つたらいきなり、「宴だああああ！！！」と
か言つて

そして今俺は宴の席にいる。

町民「まさか坊主が、本当にやつてくれるとは、思わなかったぜ」

町民「そつだなだが、坊主感謝してるぜ」

秀「いや、俺はやるべきことをやつただけだ」

町民「言つなあ坊主、大した奴だぜホント」

町民「そつだ坊主ここの県令になんねえか？」

秀「悪いが断るよ、まだ旅を続けたいから」

町民「そうかじゃあ今日は、楽しんでくれや」

町民「そのつもりだよ」

宴は夜晩くまで続いた。まるで絶望しかなかった民の顔は

生き生きとしていた。俺はそれを見た時旅に出てよかったと

そう思ったこれからも救っていこうとそう心に改めて誓った。

そして今仁の星は強く光った

第四話「VS黄巾党」(後書き)

うゝんまだ原作キャラが出てこないな

それに最初は誰をだそうか

悩めますねえゝ

第五話へはわわとあわわ（前書き）

まあタイトルを見てわかるでしょうが

あの2人です。

第五話へはわわとあわわ

あの黄巾党を討伐してから、何故か『無刀の武神』、と呼ばれる

ようになった。なんでも武器を使わずに、斬ることが出来るからとか

せめてもう少し否ねって、欲しいそして今俺は、小さな町にいる。

秀「腹が空いたな、あそこに入るか」

俺は、腹が空いたので、近くにあった。飲食店に入った。

店主「いらっしやい！何にする兄ちゃん」

秀「ああ、じゃあ麻婆豆腐と餃子を」

店主「まいど！少しだけ待ってな」

元気のいい店主だったな、あの乱世では、あそこまで元気な人は、いなかった。

食糧も水も満足には、とれないその分こっちの世界のほうが、平和だな

店主「ほい兄ちゃん出来たぜ」

秀「ありがとう、いただきます」

美味い、いつもは自分で作っているが、あまり凝らないからな

ああ、料理は出来るぞ、伊達にシバをあそこまで育てたわけじゃない

秀「ごちそうさま」

店主「おう！また来なよ兄ちゃん」

お金を支払い、店を出た。その時・・・。

？「はわわゝ！どうしよう雛里ちゃん」

？「あわわゝ！どうしよう朱里ちゃん」

何か、よく分からない、声をあげ慌てている。少女が2人いた。

まあ、放っておけないか

秀「どうしたんだ？」

？「はわっ！？だ、誰でしゅか！あう噛んじやいました」

秀「俺は止水、何かあったのか、すごく慌てていたが」

孔明「わ、私は諸葛孔明といいます（かつこいい人だなあ）」

鳳統「ほ、鳳統です（かつこいいでしゅ）」

秀「孔明に鳳統だねそれでどうしたんだ？」

孔明「じ、実は・・・」

どうやら、2人は、水鏡塾と言う所で勉学に励んでいたのだが、最近その塾の近くの洞窟を盗賊が住処にし、通りかかった商人などを襲い荷物を奪っている。らしいそこで、この2人は、その盗賊を退治してくれる

人を探しに、此処まで来たのだが、誰1人相手にしてくれなく、困っていたそうだ。

秀「なら、俺がやってやろうか？」

孔明「はわ！、本当ですか！？」

鳳統「ありがとうございます！」

というわけで、盗賊退治を引き受け、2人に水鏡塾に連れて行ってもらった。

秀「此処が水鏡塾か」

？「朱里！離里！あなた達何処に行ってたの！？」

孔明「水鏡先生、ごめんなさい」

鳳統「水鏡先生！朱里ちゃんは、悪くありません！朱里ちゃんは・・。
」

塾から出てきて、孔明達を叱っているのは、先生みたいだな

その先生の口振りからして、この2人の独断であの町まで来たのか

水鏡「まったく、心配させてあら、あなたは？」

秀「俺は、止水です。この2人から盗賊がでて困っている。と聞いたので力になろうと」

水鏡「でも、あなただけでは・・」

秀「大丈夫です。まかせてください」

水鏡「じゃあ、お願いします。ですが無理はしないでください」

秀「分かってますよ」

それから、洞窟の場所を聞いて、そこに向かった。盗賊の数はだいたい百人弱

洞窟を住処にしているから、少ないとは思ったが、妥当な数だな、
つと着いたな見張りは、2人が無用心だな

盗賊A「なあ、いつ交代なんだ？」

盗賊B「そろそろのはずだぜ」

盗賊A「そっいやくこの前捕まえた小娘どうするんだ？」

盗賊B「どっかのお偉いさんに売るんだとよだから手だすなよ」

盗賊A「へっ！誰があんな小娘に手だすかよ」

小娘？こいつら何処からか、攫ってきたのか幸い何もされてはいないようだな

しかし更生させる。つもりでいたが……。

盗賊A「何だ？てめえは」

秀「計画変更だな」

盗賊B「は？何言ってるんだこいつ」

盗賊A「さあなとりあえず、おい！ガキ身包み置いてけそうすりや命だけは助けてやる」

秀「断る俺は、お前達を殺しにきたんだからな」

斬！斬！

盗賊A「なにしやがつ・・・あれ景色がずれて・・・ぐぎゃあ！」

盗賊B「なっ！？何だよまっまさかお前が無刀の・・・武神ぶべら！」

仲間には気づかれていないようだな、大方酒飲んで、潰れているだろっが

容赦はしないぞ

斬！斬！斬！！

盗賊C「ぎゃあああああ！」

盗賊D「ぐげええ！」

盗賊E、H「ぎゃあああああああ！！」

此処が頭の部屋だな、中には気配が2つ1人は頭だろうなもう1人は、攫われた。

娘かなとりあえず入るか

頭「へへへ！この小娘を売りやしばらく遊んで暮らせるぜ」

？「ひつく・・・うう・・・ひつく」

頭「うるせえな！大人しくしてろ」

秀「大人しくするのはお前だ」

頭「なっ！？誰だてめえ・・・うわあああ！」

俺が現れた。ことに驚き慌てた頭の際に頭に詰め寄り娘から

離す。ように投げ飛ばす。

秀「大丈夫か？」

？「う、うん」

秀「さあ、早くここから出よう」

頭「まっ待ちやがれ！無事にここから出られるとは思つなよ」

そう言い頭は、武器である。戦斧をとりだし、襲い掛かってきた。

秀「はああああ！」

斬！斬！斬！

しかし振り下ろした戦斧は、届く前にはらばらにされた。

頭「なっ！？俺の戦斧が」

秀「終わりだ」

頭「まっ！待ってくれ俺が悪かった、だから命だけは」

秀「お前は、そう言ってきた者達を助けたか？助けてないだろだから……死ね」

頭「ぎゃあああああ！」

頭にとどめをさし、俺と助けた娘は、洞窟から出た。

しかしこの娘は、見たところ5〜6歳くらいだろう

秀「そういえば君の名前は？」

天蓮「天蓮は天蓮」

秀「天蓮ちゃんか俺は、止水、天蓮ちゃんはどうしてあそこに？」

天蓮「町・襲われて・攫われて、それで・・・うう」

秀「ああもういいよ、頑張ったね。」ナデナデ

天蓮「んゝ止水お父さんみたい」

秀「お父さん？」

天蓮「うん・天蓮お父さんもお母さんもいなくて、お祖父ちゃん
のところに行ったの
だからお父さんがどんな風が分かんないけどたぶん・・・こんな感
じだと思っ」

お父さんか・・・。悪くは無いな俺も娘は欲しかったし、

秀「そうかじゃあ今日から、天蓮のお父さんだな」

天蓮「本当！天蓮のお父さんになってくれるの！？」

秀「ああ、証拠に秀、これが俺の真名だよ」

天蓮「わゝい！天蓮のお父さんだ！」

俺がそう言っと、本当に嬉しかったのか飛びついてくる。天蓮

ははは、しかしお父さんが、何かむず痒いな……。お母さんは誰にしようか

秀「じゃあ、天蓮帰ろう」

天蓮「何処に？」

秀「水鏡塾というところだよ」

天蓮「うん！帰る」

元気があっていいな、シバもこういう時期があったな

だがこの娘だけは、天蓮だけは、守らないとな

天蓮「天蓮のお父さん お父さん」

ははは、守ってやらないとな、なにがなんでも

守るものが増えるのは、大変だがこの幸せを壊さないように

精一杯頑張るとしよう、春蘭と秋蘭にも早く会いたいなそんなこと

を思い俺と天蓮は

水鏡塾へと帰った。

第五話へはわわとあわわ（後書き）

オリキャラが出ちゃったぜ！しかもシュウをお父さんにしちゃったぜ！

でもいい感じじゃないかな、さてお母さんは、だれだろな？

設定

名前・天蓮

年齢・璃々とおなじくらい

身長・璃々より少し小さい

盗賊に捕まっているところをシュウに助けられた
その際シュウのことをお父さんみたいといいシュウも
そう呼んでもいいということでしたシュウをお父さんと呼ぶ
それからシュウに対し本当のお父さんのように甘える
シュウも満更じゃないというかなんかなり嬉しいがっている。

天蓮にお母さんと呼ばせる人は誰にしようかな？

候補的には

魏の人の誰かで

・強く言つと

・秋蘭や華琳あと風あたりかな

第六話　ほのぼのな日々（前書き）

朱里に雛里って可愛いよね

思わず保護欲がゲフンゲフン！どうぞお楽しみください

第六話　ほのぼのな日

盗賊を倒し、水鏡塾にたどり着いた。俺は、色々とお礼を言われ

孔明と鳳統から真名を受け取った。そして俺も真名を預けた。

その後、帰ろうとすると2人が、もう反対し、しばらく世話になることにした。

さすがに、涙目＋上目遣いは堪える。

秀「ん？」

この塾に世話になって、もう一週間は経っただろうか、目を覚まし起き上がろうとするが、上がらないそして部屋には自分以外の人の寝息が聞こえる。

秀「またか」

朱里「すう・・・すう・・・」

雛里「すう・・・すう・・・」

天蓮「ん・・・お父さん・・・すう・・・」

これは、いつものことだがらまあ、いいがそのままじゃ、

俺が起きれないな、今日は、朝食の当番なんだがなまあ、起こすのも悪いなそう思い俺は、3人が起きないようにそつと抜けた。

水鏡「あら、いつも早いわね」

秀「ただで泊めてもらうのは気が引けますから」

水鏡「ふふ、ありがとう」

秀「いえ、はい出来ましたよ」

水鏡「私は、3人を呼んでくるわ、”また”なんでしょ」

秀「ええ、お願いします」

水鏡先生は、朱里達を起こしに行った。しかしいつまでいようかさろそろ、出発したほうがいいよなとりあえず、話してみるか

朱里「ふあゝ、秀さんおはようございます」

雛里「お、おはようございます」

天蓮「お父さん、おはよう」

起きてきた。3人が挨拶をする。その内天蓮だけが飛びついてくる。

そして、それを羨ましそうに見る朱里と雛里・・・何故だろうか？

水鏡「それでは・・・」

全員「「「「いただきます」「」「」」

朱里「おいしいね雛里ちゃん」

雛里「うん！おいしいね朱里ちゃん」

天蓮「お父さん、あ〜ん」

秀「ん？あ〜ん」

天蓮「おいしい？」

秀「ああ、おいしいよ」

朝食を食べ終え、朱里と雛里は勉強をし、天蓮はお昼寝

そして、俺は・・・。

秀「ふゝ、はっ！でやあああ！」

斬！斬！

体が鈍らないように、鍛錬をする。ついでに、薪を割る？

ふむ、それにしてもいつ、話そうか・・・ん？視線を感じるなこれは・・・。

秀「出て来い、朱里、雛里」

朱里「はわわわ！？／／／／」

雛里「あわわわ！？／／／／」

ん？何で顔が真っ赤なんだ？ああそういえば、上半身裸だったなこれが原因か？

S a i d 朱里

秀さんがここ水鏡塾に来て、まだ一週間くらいかなその一週間は

本当に楽しかった。秀さんは、・・・その・・・はわわわ／／／・

すみません、取り乱しました。それで秀さんはたった1人で数百人

いた盗賊を無傷で退治した。すごく強くて、かつこよくて、優しい人

傍にいと、落ち着いて、でもときどきして、はわわわ／／／・

雛里「朱里ちゃんどうしたの？」

朱里「はうわ！？吃驚したあ雛里ちゃんか」

雛里「どうしたの？」

朱里「う、うん雛里ちゃんは、秀さんのことどう想ってる？」

雛里「わ、私は・・・好きでしゅ／／／／」

雛里ちゃんも私と同じ気持ち、なんだね。でも秀さんは、旅をして

いた。

と言っていたから、おそらく、まだ他にもいる！・・・よし！

朱里「雛里ちゃん！」

雛里「あうわ！？な、何朱里ちゃん？」

朱里「雛里ちゃん、今から秀さんのところ行くっ」

雛里「え？ど、どうして？」

朱里「それはね、・・・（説明中）どう？そうしたらずっと秀さんと一緒にいられるよ」

雛里「あわわわ／＼／＼うん！／＼／」

話も終わって、私は、雛里ちゃんを連れて、秀さんのところに向かった。

今の時間なら、秀さんは外にいるはず。

秀「ふゝはっ！でやあああ！」

いた！・・・でも／＼／＼秀さんの裸・・・はわわわわ／＼／／

それにやっぱり、かつこいいでしゅ！あう、噛んじやった。

雛里「あわわわ／＼／／」

雛里ちゃんも、お顔が真っ赤だ。多分私も・・・そんなことを考えていたとき

秀「出て来い、朱里、雛里」

朱里「はわわわ！？／／／／」

雛里「あわわわ！？／／／／」

ううゝばれちゃいました。何か恥ずかしいでしゅ・・・でも！これは

好機！

S a i d o u t

何か2人から、とてつもない気？みたいなを感じるが特に朱里

雛里は、先からあわわわ、としか言っていないのだが、朱里の雰囲気的

に話がある。感じだな

秀「何か用か？」

朱里「おお、お願いがありましゅ！あう、噛んじやいまちた／＼」

雛里「あわわわ／＼／＼お、落ち着いて、朱里ちゃん」

朱里「う、うんあの秀さん、・・・」

秀「お願いとは？」

朱里「私達は明日義勇軍に参加するために旅に出ます」

雛里「その時に秀さんに一緒に来てほしいんです」

なるほど、護衛か2人は、軍師だったな確かにこの2人だけじゃ、不安だよな

俺も心配だし。

秀「分かった引き受けよう」

朱里「あ、ありがとございましゅ！あう、噛んじやいまちた／＼／」

雛里「ありがとうございましゅ！あう、噛んじやいまちた／／／」

大丈夫かな？本当にまあ俺が守るが、もう少ししっかりしてもらいたいが

「はわわわ／／／」、「あわわわ／／／」可愛いからいいかとりあえず

秀「落ち着いて」ナデナデ

朱里「はわわわ！？／／／／」

雛里「あわわわ！？／／／／」

頭を撫でたが逆効果だったか、むうどうしようか？と思っていた。
その時・・・

水鏡「皆さん、そろそろお昼にしましょう」

秀「はい、さあ行こう朱里、雛里明日の準備もあるだろ」

朱里＆雛里「「はい！」「」

さて、何か明日からさらに、忙しくなりそうな予感がするな
というか、そろそろ春蘭と秋蘭に会いたくなってくるな

(と秀が考えているとき)

春蘭＆秋蘭「くしゅん！」

？「どうしたの春蘭、秋蘭風邪かしら？」

春蘭「い、いえ」

秋蘭「そういうわけでは」

？「あら、じゃあ誰かが貴女達の話でもしてるのかしら」

春蘭「秀・・・かな？／／／」

秋蘭「そうだといいな姉者／／／」

？「何か、妬けるわね」

と何処かでこんな会話が、あつたとか。

第六話 ぼのぼのな日々（後書き）

ぼのぼのといった感じですかね。

次回いよいよあの3人の会います。

アンケート

ラスボスは誰？

？南斗聖拳使う敵

？北斗神拳使う敵

北斗の拳キャラ出るキャラの設定

？シュウ一緒に転生した

？未来の希望ということで子供（天蓮くらい）

？天の御使いとして

アンケートにご協力くださいお願いします。

ちょっとしたアンケート（前書き）

これからこの作品の行き先は！？

ちょっとしたアンケート

どうもこの小説『再び輝く仁の星』の作者龍斗です

この度、ちょっとしたアンケートをとるために、この場を設けました。

私の小説の主人公であるシュウですが、今さらながら俺口調はいいのかな？

一人称を私に変えたほうがいいのかな？

ちなみにそうする場合は、朱里や雛里次回くらいに会う劉備、関羽、張飛に

「俺より、私のほうが似合っていますよ」とか言われて、以降私になるという感じがですが

どうでしょうか？

そして、もう一つ本作のラスボスのことについてです。

北斗神拳相手では、分が悪いとの意見があったので、敵は南斗です。

？もうサウザーを出しちゃう

？北斗の拳2で「北斗の先人」とか聞きますがはつきし悪霊

その悪霊の南斗版「南斗の先人」を出す（絶対いる！）

こんな感じです。答えてくれたら嬉しいです。

小説のほうも、頑張って描写などを上手く伝えれるように書きます。

これからも『再び輝く仁の星』をよろしく願います！

ちょっとしたアンケート（後書き）

魏 じゃなくて、全 になりそうな予感

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9469n/>

再び輝く仁の星

2010年10月15日04時26分発行